

ジャウイ文書研究会ニューズレター

第 6 号 2002 年 10 月 12 日

発行者：ジャウイ文書研究会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1

電話 03-3238-3697 Fax 03-3238-3690

上智大学アジア文化研究所 川島緑研究室

e-mail: midori-k@sophia.ac.jp

目 次

I. 研究会予定	p. 1
II. 研究会記録	
第 12 回研究会 (2002. 7. 13)	p. 1
第 13 回研究会 (2002. 9. 29)	p. 5

I. 研究会予定

10 月 12 日 (土) 上智大学

11 月 9 日 (土) 上智大学

詳細は追って連絡いたします。これまで本研究会のご連絡を受け取っていない方で、今後、案内を希望される方は事務局にその旨、ご一報ください。

なお、12 月 1 日 (日) 午前、岡山大学において、東南アジア史学会第 68 回研究大会の会員自由企画として、「ジャウイ文書研究の可能性 一壁としてのジャウイ、橋としてのジャウイー」を開催します。こちらも詳細は後日ご案内いたします。

II. 研究会記録

第 12 回研究会

日時：2002 年 7 月 13 日 (土) 10:30-20:00

場所：上智大学四ッ谷キャンパス 9 号館 4 階 458 号室 出席者：16 名

(午前中の出席者：10 名)

1. 勉強会「ジャウイ入門」第3回

ジャウイ綴りマレー語の書き方と読み方

山本博之（東京大学）

本年5月から開始した初心者向け勉強会「ジャウイ入門」の最終回として、ジャウイ綴りの読み書きの基本を学んだ。報告者は、マレー語文法の父といわれる Zainal Abidin bin Ahmad (Za'ba) のマレー語綴りの指南書や、本研究会で昨年度勉強会に用いた Belajar Tulisan Jawi など、マレーシアで発行された主要なマレー語ジャウイ綴りの教科書や研究書に当たり、20世紀のかなりの期間、広く用いられていた綴りの法則性を抽出し、その要点をコンパクトにまとめた説明書を作成した。勉強会では、これを教科書として使い、練習をまじえながら学習した。この教授法の特徴は、ジャウイ綴りの書き方、読み方の法則性を抽出し、論理的かつ効率的にジャウイの読み書きの基礎を習得することを目指している点にある。具体的には、子音・母音の組み合わせによって場合分けし、それぞれの読み方について考えられる可能性を論理的に導き出し、接辞や文法などの知識を用いて蓋然性の高い読み方に絞り込む、という方法をとっている。

実際にジャウイ文書の講読を行うときには、ひとつのジャウイ綴りに思いのほか、いろいろな読み方が考えられるので、それらについて辞書で意味を確認しながら、文脈にもっとも適したことばを探し出さなければならない。非常にやさしい文章で、内容も単純な場合には、もっとも適当な読み方に比較的容易にたどりつくことができるが、内容的に難解な文書を読むときには、読み方がわからないとそのことばの意味がわからず、わからないことばが多いと、文脈もわからなくなり、次に出てくることばについても、もっとも適切な読み方と意味が何であるか判断しにくくなり、收拾のつかない事態に陥ってしまうことがある。そのような場合、綴りの法則性にもとづいて、可能性のある読み方に絞り込み、さらにもっとも可能性の高い読み方のことばから優先的に辞書で確認することにより、かなり労力を節約することができる。

このようなジャウイ綴り学習方法は、ジャウイ資料の利用における大きな障害を取り除くことによって、関連分野の研究の発展に大きく貢献するといえる。〈川島緑〉

2. マレーシア・イスラム党の政治思想：ハーディ・アワン・トレンガヌ州主席大臣の著作を中心に (PAS' s Political Thought and Hadi Awang' s Amanat)

中田考（山口大学）

本報告では、マレーシアのイスラム政党、「汎マレー・イスラム党 (Party Islam Se Malaysia : 以降 PAS)」の副党首であり、現トレンガヌ州主席大臣であるハーディ・アワン (Hadi Awang) の政治思想、特に彼が行った「タクフィール (takfir、無信仰者 (kafir) であると判断すること、マレーシア語では mengafir)」という行為の、イスラム法学から見た位置づけを中心に発表がなされた。

まず、資料としてハーディー・アワンが書いた「ムスリム信条序説 Muqaddimah

‘Aqidah al-Muslimin」という本が紹介された。この本は、普段はローマ字で執筆しているハーディー・アワンがジャウィで書いたというところに特徴があると指摘された。中田氏によると、「ムスリム信条序説」が出版されたトレンガヌでは、今でもローマ字表記よりもジャウィの方が簡単に読めるという人がたくさんいるとのことである。

次に、PAS の歴史、イデオロギー、組織について簡単な説明がなされた。PAS は 1951 年に設立されたイスラム政党である。その目的は、イスラム国家建設、イスラム法（シャリーア）とムスリム信条（アキーダ）のための戦い、アラビア語の普及などである。国政のレベルでは野党であるが、1959 年にはクランタン州とトレンガヌ州で第一党となり、一時は両州で政権を失うも、1990 年代には再び政権を取り、現在に至っている。イスラム政党としての特徴はウラマーの影響力が強いことであり、1983 年にウラマーによる指導が確立した。ハーディー・アワンは 1947 年にトレンガヌに生まれ、1964 年に PAS に加わった。その後、マディーナのイスラム大学（シャリーア学部）、カイロのアズハル大学（シャリーア政治学修士）で学び、1977 年には ABIM（マレーシア・イスラム青年会議）のトレンガヌ支部長、1983 年には PAS の副党首就任と順調に出世し、1999 年にトレンガヌ州主席大臣となった。

本発表で取りあげられたハーディ・アワンの声明（Amanat）は、ハーディー・アワン自身がしゃべったことを、別の人物がまとめて出版したものである。ハーディー・アワン自身は、その出版について知らされておらず、突然印刷された物が出てきて驚いたとのことである。その本は 20 年前に執筆されたものであるにも関わらず、2001 年に突然新聞の一面で紹介され、問題となった。その内容は、一読するとマレーシア与党の UMNO と国民戦線（Barisan Nasional）を無信仰者として非難し、彼らに対する戦いをジハードと位置づけているように理解できる。またその戦いの中で死んだものは殉教者（シャヒード）となるとも述べられている。UMNO の側はこれを根拠に、PAS が UMNO や国民戦線を無信仰者だと決め付け、それに対するジハードを呼びかけているとして批判した。さらに、2001 年 9 月 11 日のテロ以降、PAS はタリバンと同じであるとする言説も見られるようになった。

しかし、中田氏は、上記の声明を正確に理解するためには 2 つの点を考慮する必要があると指摘している。まずは声明がなされた時の状況である。マレーシア北部では、UMNO と PAS の関係が悪く、お互いのモスクで礼拝することはないし、お互いの墓地に埋葬されることもないという。件の発言がなされるにいたった直接のきっかけは、過激だと言われていた説教師（PAS のメンバー）が治安部隊に包囲され、投降を拒否したために戦闘が起き、最後に殺された事件であった。ハーディー・アワンは彼を殉教者だと言ったため、UMNO の怒りを買って、それが 20 年たった時点でまた蒸し返されたというのが騒動の発端であった。

さらに重要なのは、ハーディー・アワンの声明の、イスラム法学から見た位置づけである。中田氏によると、イスラム法学においては「これこれしかじかの行為を行ったものは無信仰者である」という言説と、特定の個人を指して「・・・は無信仰者である」と決定することの間には本質的な差がある。通常、ムフティーは、ある事象に関する法的見解を述べるものの、裁判官の任務を負わされない限り、具体例の判断は

避けている。つまり、上記の声明も、よく読むと UMNO や国民戦線が無信仰者と特定しているわけではないことがわかる。

実際、この声明が発表された後でも PAS から戦闘としてのジハードが行われたこともなく、執筆から 20 年も経った時点で突然新聞で発表されたこと、問題となった発言だけが前後の文脈から切り離されて独り歩きしてしまったことなどから、ハーディー・アワン自身が迷惑しているということが指摘された。

しかし、ウラマーのレベルでは上記の違いが明確に理解されているとはいうものの、イスラム法学に通じているわけでもない一般の PAS 党員がその違いをどの程度認識しているのかわからないという問題も同時に指摘された。その意味では、新聞で取り上げられて問題にされる妥当性があるとも言える。

次に、ハーディー・アワンのタクフィールに関する歴史的背景について、いくつかのコメントが与えられた。まず新しい時代では、エジプトのジハード、ジャマーア・イスラーミーヤ、イフワーン・ムスリミン、更にインド亜大陸のジャマーアト・イスラーミーなど思想的に通ずるものがある。更に遡るとアラビア半島のワッハーブ派、そして、13-4 世紀の法学者・神学者であり、現在のイスラム急進派の思想的背景となっているイブン・タイミーヤまでたどり着く。

またマレーシアの文脈で考えると、ムハンマド・ハヤー・シンディー、ムハンマド・サンマーニー、ダーウード・ファタニーと続くウラマーの思想の影響を受けている可能性があることが指摘された。パタニ、トレンガヌ、クランタンというのは昔からタクフィールなどの思想が強く、反植民地運動もここから出たものが多いとのことであった。ここで発表者が強調したのは、アラブ世界から影響を受けてタクフィールその他の思想が東南アジアに出てきたということではなく、ウラマーの広いネットワークの中で共時的に現れたということである。

最後に、PAS の現在のありかたは、イスラム系野党が、自らが無信仰者と認識している政権と平和的に共存できる例として、イスラム地域研究にとって重要であるとの指摘がなされた。

質疑応答

川島氏からは Kafir と Menafik (偽善者、偽ムスリム)、Jihad と Pulang Sabil の違いについて質問があった。

東長氏からは、ハーディー・アワンの思想背景となったつながりが、PAS 全体の傾向を表しているのかどうかという質問がされた。それについては、PAS の中にはデオバンド派、伝統的なシャーフイー派の流れを汲むウラマーも多いとの指摘がなされた。

西尾氏からは、PAS の中でジャウイ文書 (Kitab Kuning) がどの程度使われているのかについて質問があった。それに関しては、ジャウイの本はウラマーの勉強会などでは使用されているが、中田氏が PAS 有力メンバーにインタビューなどを行う際にはまったく言及されることはなく、ジャウイ文書はあまり大きな位置を占めていないとのことであった。

新井からは、ハドラマウト出身者とウラマー・ネットワークについてコメントがな

された。それによると、ハドラマウト出身のウラマーでもそのほとんどがヒジャーズで教育を受けており、やはりメッカ・メディナを通したウラマー・ネットワークが重要であったとのことである。〈新井和広〉

3. ジャウイ・テキスト Al Munir 講読

レジュメ担当者：

菅原由美（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員）

西芳実（東京大学大学院）

前回に引き続き、第1号3ページ25行から4ページ16行まで、翻字案の検討、和訳を行った。

第13回研究会

日時：2002年9月29日（土）10：30-：19：00

場所：上智大学四ッ谷キャンパス10号館3階322号室 出席者：10名

1. ジャウイ・テキスト Al Munir 講読

レジュメ担当者： 西芳実（東京大学大学院）、服部美奈（岐阜聖徳学園大学）

前回に引き続き、4ページ17行から5ページ4行までの翻字案の検討、和訳を行った。創刊号の最初の主要な記事を読み終えたので、Al Munirの講読はここでいったん終了することとし、今後しばらくの間は、1950-60年代のジャウイ誌やイスラーム思想書、パタニのウラマーの著作、ジャウイ綴りの研究書など、異なる種類の文献の一部を、1回ずつ読んでみることになった。

2. 「ジャウイ文書研究の可能性」基調報告の構想

川島 緑（上智大

学）

本報告は東南アジア史学会岡山大会の会員自由企画として行われるジャウイ文書研究をテーマとしたパネルの基調報告の構想案である。報告の主要な目的は、これまでのジャウイ文書研究の問題点を指摘しつつ、ありうる研究の方向性を示し、この研究の重要性と可能性を指摘することである。

まず、最初に「『見えない仕切り』としてのジャウイ」と題し、報告者個人の経験をふまえて、研究者にジャウイで書かれた資料を軽視したりその利用を躊躇したりする姿勢があることを指摘しつつ、ジャウイ文書研究の必要性を強調した。

報告の前半は、ジャウイ文書についての研究を始める上で必要不可欠な知識を提供する目的から、ジャウイの定義、ジャウイが作成された時期、ジャウイ文書の種類の多様性、ジャウイの表記方法、に分けて報告がなされた。まず、ジャウイの一般的な用法は「マレー語のアラビア文字表記」であるが、ジャウイ文書研究会では広義のジャウイを採用する。すなわち「東南アジアにおけるオーストロネシア語系現地語のアラビア文字表記の総称」を意味し、マレー語のみならずジャワ語やタウスグ語など諸言語のアラビア文字表記がこれに含まれる。報告者はペルシャ語圏やトルコ語圏などを視野に入れたアラビア文字ネットワークの中に「ジャウイ・ネットワーク」が存在し、他の諸語圏との相互関係があることを指摘した。

次に、ジャウイが作成されたのは、東南アジアのイスラーム伝来以降であり、14世紀初頭のトレンガヌ碑文に遡ること、その種類は碑文や王統譜から、外交や商取引の文書、イスラーム学の本（キターブ）、護符やロゴにいたるまで、非常に多様であることが指摘された。さらにジャウイの表記方法には母音記号をつけるもの（ジャワ語、ブギス語、タウスグ語など）とつけない（マレー語、インドネシア語）に分かれることが指摘された。なお、本研究会ではすでに共通理解となっていることだが、東南アジア史学会では、アラビア語にない子音の表現方法やアラビア文字に工夫を加えた文字が使用されていることを説明する予定である。

報告の後半は、ジャウイ文書研究の5つのありかた、を説明して研究の方向性を指し示した。列記すると、

- (1) 「宝探し」型ジャウイ文書研究
- (2) ジャウイ文書を他の資料と併用して、個別の地域社会の研究を深める
- (3) 個別社会においてジャウイ文書が占める位置についての研究
- (4) ジャウイ文書という筆記コミュニケーション手段を共有する人々のつながりに注目する研究
- (5) (2) - (4) のための基盤を整備する活動

(1) はやみくもに文書を収集し「解説」するような研究であり、報告者はこうした研究の姿勢を批判した。重要であり、発展させられるべきなのは(2)、(3)、(4)であり、ジャウイ文書を相対化し、ジャウイ文書の研究意義を明確にする必要がある。そしてこれらの研究を実り多いものにするために、研究工具や資料所在の情報収集と公開や研究者のネットワーク形成が必要である。

以上の報告に対して活発な議論がかわされた。まず質問とコメントが集中したのが「ジャウイ・ネットワーク」についてであった。報告者はアラビア語を囲むペルシャ語圏、ウルドゥ語圏、トルコ語圏、マレー語および他のオーストロネシア諸語圏などを円で図示し、アラビア語との関係を実線で、その他の語圏同士の関係を点線で結んだ。これに対して、トルコ語とウルドゥ語はペルシャ語の影響を強く受けており、同心円的に描かれるべきであること、報告者がスワヒリ語・ハウサ語・ベルベル語などアフリカ諸語を等閑視していることが指摘された。母音記号の有無についても、インドネシア語であっても宗教書では母音記号がついている例があり、その意義に疑問を投げかける意見がだされた。報告後半のジャウイ文書研究のあり方については、(1)について報告者が問題視しているのは主に倫理的な側面であることが指摘された。

本報告は東南アジア史学会における発表の「たたき台」であったが、それ以上に研究会参加者がジャウィ文書研究の位置づけを再確認し、今後それぞれがジャウィ文書講読や論文執筆をする上で基礎となるような知識と議論を共有する絶好の機会となった。〈見市建〉

3. ジャウィ文書から見た 1955 年の総選挙（仮）・中間報告 — 『カラム』誌のインドネシア情勢分析を中心に—

山本博之（東京大

学）

マラヤとインドネシアの 1950 年代は植民地統治から議会制民主主義へと移行する時期であり、最初の総選挙もともに 1955 年に行われるなど共通点が見られる。しかし、ムスリム住民の政治参加のありかたという点では、インドネシアで全国規模の反乱や最大のムスリム政党の非合法化などが起こった一方で、マラヤでは議会制民主主義の枠組みが受け入れられたという違いが見られる。山本氏はこの点に着目した。本報告は、こうした違いがなぜ生まれたかという問題について、マラヤのムスリム住民がインドネシアのように反乱に向かわなかった理由を探ることによって考察することを試みる山本氏の研究の一部として報告されたものである。山本氏は、マラヤのムスリムがインドネシアにおける選挙とその後の一連の動きを参照していたことが彼ら自身の政治参加のあり方に重大な影響を与えていたとの仮説を立て、これを踏まえて、マラヤのムスリムがインドネシアの状況をどのように認識していたのかという観点から、シンガポールで発行されていたジャウィ誌『カラム』に掲載されたインドネシア総選挙関連の記事（1953 年 4 月—1958 年 5 月）の分析を行った。本報告はその結果についての中間報告である。

山本氏はまず『カラム』誌の記事を総選挙前、総選挙直後、戒厳令布告後の 3 つの時期に分け、インドネシアのムスリムの置かれた状況やとるべき道についての『カラム』誌の認識が時期によって変化していることを確認した。ついで、関連する記事のなかで山本氏が注目している議論として、①「民主主義」のあり方、②イスラム国家を実現する方法、③政治指導者の責任の対象、④「胞民」概念についての議論を紹介した。

質疑応答では「胞民」概念をめぐる質問が集中した。

「胞民」は『カラム』誌の編集人であり主要な執筆者である Edrus が使用する用語 umat を山本氏が説明したものである。山本氏は Edrus の記事の中で使用される umat について分析し、umat が、これまで一般に使われてきたような特定の宗教と結びついた人々のまとまりを指すものとしてではなく、政治的にせよ文化的にせよ宗教的にせよ、何らかの有機的なつながりをもった人々のまとまりを想定して使われており、限りなく国民に近い概念であること、その一方で、国家との結びつきを必ずしも前提としていない概念として使われていることを見出し、これを「胞民」という新しい概念として呼ぶことを提唱した。質疑応答を通じて、Edrus の umat 概念が、bangsa

Indonesia に代表される bangsa 概念や、境界を持たずにつながることを強調するような「同胞」概念とは異なる特質を持っていることなどが説明された。

また、山本氏はジャウイ誌『カラム』の特質として①マラヤやインドネシアのムスリムが寄稿し、政治共同体の枠を超えて互いの地域についての意見を交換する場になっていた、②ジャウイで書かれたマレー語が使用されることによって、事実上、読者がムスリムに限定されることになった、という点を挙げ、ジャウイ・メディアが持つ、境界を乗り越える側面と境界をつくる側面を指摘した。こうした側面は、それがどのような意味を持っているのかも含めて、ジャウイ・メディアが持つジャウイ・メディアゆえの特質として、12月に開催される東南アジア史学会研究大会会員自由企画「ジャウイ文書研究の可能性」でさらなる議論が期待されるテーマである。〈西芳実〉

このニューズレターはジャウイ文書研究会の記録、および、ジャウイ文書研究に役立つ情報提供を目的としており、研究会出席者に会場で配布しています。研究会に出席できない方でこのニューズレターの入手を希望される方は、希望する号を明記し、あて先を記入し、240円切手を貼ったA-4サイズ返信用封筒を同封の上、お申し込みいただければ、郵送いたします。なお、研究工具や資料、文献の紹介、研究報告など、投稿を希望される方は、事務局にご連絡ください。

ジャウイ文書研究会ニューズレター 第6号

(2002年10月11日印刷)

2002年10月12日発行

上智大学アジア文化研究所 川島緑研究室

発行者：ジャウイ文書研究会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

電話：03-3238-3697 Fax：03-3238-3690

e-mail：midori-k@sophia.ac.jp